



# ナビゲーション

——— 自立への道案内 ———



自立生活センター・あるるの(左から)安原さん、鈴木さん、太田さんです。

## もくじ

|                                                         |    |
|---------------------------------------------------------|----|
| ●「自立生活センター」(CIL)に来てみてや! CILってこんな所で〜す! 第2回「自立生活センター・あるる」 | 2  |
| ●連載エッセイ(筒井純子)                                           | 11 |
| ●編集後記                                                   | 16 |

「自立生活センター」(CIL)に来てみてや！CILってこんな所で～す！

## 第2回 「自立生活センター・あるる」

取材日：2010年10月28日（木）

今年度のナビゲーションでは、各地の自立生活センター（CIL）を訪れセンターが出来るまでの背景や、事業の特徴などを伺い、情報として発信し、もっと地域の人達にCILの活動を知ってもらいたいと思っています。

今回は大阪市都島区の「自立生活センター・あるる」を訪問しました。お話を伺ったのは代表の太田康裕さん、事務局長の鈴木千春さん、そして現在は作業所「あるくる」（生活介護）のサービス管理責任者の安原美佐子さんの3名。いずれも「あるる」設立当時のメンバーです。

### 「頸損連の勉強会から」

南光：よろしくお願いします。まず「あるる」が出来るまでの経緯を教えてください。

安原、鈴木：じゃ、代表の太田から。

太田：なんでやねん。ずっとこいなあ。えっと、きっかけは、まず、僕達が出会ったのは、大阪頸髄損傷者連絡会というのがありまして、僕と鈴木さんが会員になっていまして、鈴木さんとは知り合いだったんですけど、頸髄損傷の勉強会に安原さんが来てて知り合いました。

安原：私は10年前に友達に誘われて、初めて頸損連のイベントに行ったのがきっかけ。

足立：定期的に勉強会ってというのはやってたんですか？

太田：あの時は、1年に1回か2回。その当時は毎月1回行事みたいなのをやっていました。いつごろやってましたっけ？

安原：2000年ぐらい。

太田：そこで初めてみんなが出会った。

南光：今はこの法人の代表の東谷太さんとも？

太田：東谷さんとも大阪頸髄損傷者連絡会で知り合っていました。きっかけとなったのは、そこでみんな知り合うようになって。ちょこちょこ会うようになってきたんですけど。

安原：童夢KANSAIとかで、また出会ったりとかして遊ぶようになってんねえ。

太田：童夢KANSAIで色んな人と出会うようになって、自立生活センターの存在を知りまして、僕たちとしても、自分たちのやりたいことであつたりとか、社会に対するメッセージなんかを自分たちで伝えていけへん？みたいなんが確かきっかけ。勉強会みたいなんしよいうかっていうところから始まって、自立生活センターの名前は知ってたけど、中身っていうのは全然しらなかったんで、自立生活センターについて勉強していこうや。ということにな

って。東谷さんとかにも色々教えてもらって。

太田：そこから勉強してきたりとか、各センターにも実習に行ったり。ナビにもお世話になりました。

足立：ちなみに勉強不足で申し訳ないんですけど、童夢KANSAIって？

鈴木：いろんな障害者の人達の遊びのサークルみたいなものですね。月1回、花見とかビアガーデンとか開催されています。

安原：あの頃って市町村障害者生活支援事業が始まって、大阪でもナビとか当事者団体が事業を受けていって、出来るだけ当事者団体についていうことで、各地にそういうCILを立ち上げようっていう動きがあり、ピア・カウンセリング講座や障害者リーダーを育成していくための講座などがあって、各地のCILで活動している障害者と出会った。「みんなでセンター作っていこうや」という機運があって、その動きの中に私たちも居た。それがCILを立ち上げる大きなきっかけとなった。

南光：当事者のメンバーはこの3人と東谷さん？

太田：立ち上げたのはこの3人。東谷さんは、まだその頃ピア大阪に居たんで。サポートはしてくれていました。



取材の様子

当事者主体のセンター作りは「障害の受容」から

安原：最初、私は障害を受容するのが難しかった。同じ障害のピア・カウンセラーに会いに

行ったりとかして、自分の障害をみつめるということに取り組んだ。自分たちがエンパワメントすることや、チカラを付けていくところから始まった。

南光：障害を受け入れることに対して抵抗があったの？

安原：いろいろありました。最初、コウちゃん（平下耕三さん・現夢宙センター）に会ったのが衝撃的でした。よく似た障害の人が「自分に自信がある」っていうことをサラッと言いながら「なんでやねん」と思ってた。「どこにそう思えるようなことがあるんや」と思っていた。そんな時に東谷さんが「エンジェルさん（CIL「広島レモンの会」代表）に会いに行こう」と言ってくれた。みんな自腹きって広島まで行ってくれたのが大きかった。今思うといい思い出です。障害を受け入れるのには5、6年かかりましたが…。

南光：障害の受容について、太田くんはどうだった？

太田：障害についてはそうですね。プールの飛び込みで頸髄損傷になったんですけど。そのときは、なかなか障害を受け入れるのは難しくて、受容するのには時間がかかった。けど、やっぱり、みんなと出会うことによって、障害者っていう意識が薄れていったっていうのがあって。確かに健常者のころに比べると自分で出来ないことが増えたけど、自分がみんなとワイワイ。その時は、なんも背負うこともほとんどなかったから、やりたい放題っていうか、みんなと好きなことをしてた。それが僕にとってはすごく楽しかった。そこから障害を自分の中で受容できていったな。だからみんなと出会えたのは、すごく大きくなって思いました。あるるを立ち上げたと同時に自立生活を始めていくのですが、「みんなで生活支えていこうや」って介助者も一緒に集めてくれて。ILPもやって介護マニュアルを作ったりしました。安原：自分たちがエンパワメントや社会参加していくことが、自分たちの力をつけていくことになって、そのままCILに繋がったみたいなのがあります。

南光：ナビの場合は、中部という母体があって作っていったからなあ。経過が違うなあ。

安原：最初、鈴木さんが自分で自動車運転していることに、すごい衝撃を受けました。障害者でも運転できるんやって。そんな事すら知らなかったから、やっぱ繋がって大事やなと思った。

鈴木：童夢KANSAIで会った時に、送って行ってそれ以降の行事には、私が高槻で、安原さんが吹田やったから、乗せて一緒に頸損連の行事にも無理やり連れて行ったりしました。

太田：若手勉強会みたいなことも月1回してた。自分たちで発表したいことを持ちよって。10人ぐらいで介助についてとか制度についてとか自分でテーマ決めて。

南光：鈴木さんは仕事はしてなかったん？

鈴木：このメンバーと出会う時には仕事はしてなかった。どこかの自立生活センターに関われたらいいなとは、うっすら思っただけなんですけど。

安原：何でCILの事、知ってたん？

鈴木：たぶん、ピア・カウンセリングの本を読んだりとかしてた関係で、他府県で自立生活

センターやっている知り合いがおって、そこで月1回で1年間かけてするILPに参加したことがあったんです。その時に、ちょっと遠いんですけど自分一人で電車に乗って目的地に行ったりとか、話を聴いたり、買い物のILPやったり。そんなのをやりながら自分自身が出来るって思えることが増えてきたなって思うようになって、こんな取り組みは面白いなって思いだしてた頃です。

南光:あるるの正式な立ち上げはいつ？

太田:2001年の7月。

安原:協力してくれる人が多かった。中部とか障大連とか。

南光:東谷さんがピア大阪を辞めて、あるるに来たのはいつ？

安原:2003年。今思えば色んなところ行って、全国に友だちが出来たりとかして、すごく楽しかった。地方の人と出会えるのはとても大きいと思う。



太田さん

「あるる」で大事にしていることは？

南光:ところで「あるる」の名づけ親は？

安原:鈴木さんとピア大阪のテーブルで。辞書開いて名前をどうするかはなしをしてて。

鈴木:最終的に決めたのは言葉の響きです。意味は「縷々」細く長く絶え間なくっていう意味合いがあって、そこに「あ」をつけて。

南光:なんで、「あ」を付けるの？

鈴木：あなたの「あ」。「困った時にあるるが、あるる」（笑）こういう名前をつけるのは関西版やなあって言われました。東京は大抵地名をつけてる。

足立：ちなみに作業所の「あるくる」は？

安原：いろんな名前をメンバーから募集してしっくりきたのがこれ。「あるるに来る」っていう。親しみが持てるし。でもこれも響きがいいのもあると思う。

南光：：響きが大事かあ。

南光：あるるで一番大切にしてる事、こういう自立生活センターにしたいなあと思ってる事は？

安原：社会を変えていく事。自分たちが社会参加する、楽しく生きる、色んな人とつながる、自己実現を可能にしていくことが、出発やと思います。我慢する、何かを諦める、不当な扱いをされるではなくて、どんな人もあたりまえに社会参加できるように変えていきたい。

南光：太田くんは？

太田：自立生活を始めて自分が今まで我慢して来た事とか、嫌やっと思う事をなくしたいと思ったし。自立生活センターで働きたいと思ったのは、色んな事を我慢したり楽しくない生活をしてる仲間がたくさん居るっていう現実があると思うので、そこをもっと変えていきたい。社会を変えればどんな重度の障害者であっても地域で当たり前のように暮らしていけるようになると思うし、仲間の自立するサポートをしていると、もっと自立障害者を増やしていきたいなってすごく思います。一人の仲間が自立することで色んな人と繋がって、社会資源も色んな活用して色んな人と繋がり持たないとアカンし、そこで障害者観であったりとかも変わっていくんじゃないかなあ。まだまだやと思うけど、もっともっと仲間の自立を応援していきたい。

南光：鈴木さんは？

鈴木：ここに自ら相談に来る人はある程度主体性はあると思うけど、ここにたどり着けず環境に埋まってる人達もたくさんいるし、そういう人達に何を伝えていけるのか、そして何を一緒に考えていけるのかっていうのをこれからやっていきたいなって思う部分はあります。交通バリアフリーの事も取り組んでいたりするので、そういった視点からも交通のことってものすごく幅広く、その上で意見を言うってものすごく難しいんです。最近やっていて思うのは、交通機関を使いづらいと思っている人の声を聴くっていうのが一番大事なんだなっていう事と、それをいろんな人に伝えていこうと頑張っているんですけども「辛いねん」っていうところを、やっぱり周りが聞く形ではまだまだないのでそれを変えて、周りがそういう声を聞ける社会にしていきたい。

南光：鈴木さんの場合、車運転できるんであえて公共交通機関を使わなくてもいいわけやなかあ。それで、交通問題に取り組もうって思ったのはなんかあるのかな？



鈴木：車がないと行けない場所もあるし、昔はそう思って免許を取ったんですけど、行きたいところに行けないのは、おかしいと思うようになってからは、別に車にこだわる気持ちは持たずに、今は公共交通機関を利用しています。

南光：安原さんは前はずっと歩いていて、今は電動車椅子使う時もあるやんかぁ。交通の問題って今と歩いていた時の感じとどうなんかなぁ。違うかな？

安原：車椅子に乗るようになって、行きたいところに自由に行ける。いろいろたいへんなこともあるけど、自由なほうがいい。

足立：ただ、公共の交通機関でもまだまだ問題があるでしょう？

「いろんな視点を持つこと」

安原：JRに乗ると言葉の節々に「乗せてやってるぞ。」とか「乗ってもらう事が迷惑」みたいなことを田舎の駅に行けば行くほど言われる。「この人達も、車いすの人達や団体で来ることに慣れてないんや。」とか思う。どうしたら自分たちが快適に乗れるんやろとか、日々思いながら乗ってます。もっと自由に乗りたいです。車いすになって、乗り換えには30分ぐらい間を空けて、新幹線は前もって予約したりと、いろいろ調べたりするのは自分にとってのILPだと思っています。そして、理不尽なことを言われたら交渉する。そんなひとつひとつのことを社会に伝えるのが私たちの役目だなと思ってる。鈴木さんが交通問題やっているんで、不便に感じたら変えていこうという視点になるので、私たちのセンターに鈴木が居てるっていうのは大きいかなあって思う。

南光：つついっ当たり前になってしまうもんねえ。

安原：「そんなもんなんやな」という意識が強すぎますよね。いつもそこが乗車位置の車掌のとこだし、そこに乗るもんなんやと思っていたけど、よう考えたら何でいつもここに乗るなアカンねんとか思う。

足立：女性専用車両にさせられるっていうことにおかしいと気づいたのは最近です。特に天王寺の御堂筋線乗った時。絶対、エレベーターから降りてすぐの車両が女性専用車両なんですよ。聞かれることもなく普通にさせられる。それが当たり前になってますもんねえ。

南光：障害者も差別に対して敏感になっておかないといけない、と思うね。ところで、「あーるのここは自慢できるぞ！」というところは？

安原：基本的にはいろんな人と出会って、社会を変えていく場所にしていきたいので、私たちはやりたいっていうことをやってたりするじゃないですか、鈴木さんは交通。私はピアカン。太田くんは自立障害者を増やしたい。というそれぞれの思いがある。各々やりたいことが、自慢になるのかな。



安原さん

「社会を変えていこう！」

南光:それって凄い事やと思う。自分のやりたい事やれてるなんて、そう居らんと思う。

安原:やりたいことやってないんですか？

足立:僕の場合で言うたら、自分のやりたい事って言う事よりも、大阪の南の地域から出てきて、こんな世界があるんやなっていう未だにいろんな事にビックリしてる。これが当たり前じゃないんやなとか、南光が言うたみたいに敏感にならなアカン。っていうのに今ようやく20何年経って気づいて、たくさん仲間が居て、こういう事をみんなそれぞれやってる。ってるってことに、それに驚いてる感じ。じゃ、それで自分に何が出来るのかなあっていう考えに移ってきてる状態なんかなっていうのを感じますけど。

南光:ニューアンドグズの毎日か？

足立:そんな感じですねえ。新しい発見、気づき。だんだん自分の中で感覚がちょっとずつ変わってるなあってような感じは、例えば地元に戻った時、今までに感じたことがない不快感・違和感で埋めつくされてるなあって思ってる。

南光:私の場合は、ピア・カウンセリングにもう一度チカラを入れていきたいなと思ってる。実際にはなかなか出来てませんけど。

安原:基本的にやりたいことは違うけど目指してる方向は、社会を変えていくってことですよな？

南光:もちろん、そうです。最終の目標は社会を変えていく事だと思います。

足立:あるを一言でいうたらこの一言やなみたいな「キャッチフレーズ」ありますか。

安原:別にないなあ。

南光:「世の中を変えよう」ちゃうんかなあ。そういうのが伝わってきたんやけど。

安原:キャッチフレーズって一丸となつてとかですよな。キャッチフレーズがあったらそれに縛られる。ある意味制約してしまうかもしれへんし。それから、逸れる人が出てくるかもしれない。馴染めない人が排除されるのもおかしいと思う。それぞれがやりたいことをやったらいいと思う。「あなたが困っていることは、私も困るんだよ。」それに対して一緒に言



っていくよ、みたいなものがあります。

太田：バラバラに人それぞれやっているというわけではなくて、みんなやりたいことがつながっている。そこに向かっているみたいなところはあるから。

足立：あるで今一番チカラを入れてること。「今、あるはこれをやってる！」「今はこれを一番に据えてる。」みたいなものはありますか？

太田：僕が思うのは、自立する人をみんなで支えてるな。応援してるな。っていうのをすごく感じるの、そこにみんなチカラ入れてくれてるんちゃうのかなあ。自立したら終わりっていうのは違うじゃないですか。そこから自立してからの生活っていうのは、すごいいろんなことあるし、これから、その人がどうやって生きていくかっていうのも大事なことやと思う。その人がどう思うかが一番大事なんですけど、僕たちのサポートっていうのも必要になってくる部分もあると思うし、一人の人をみんなでサポートしていくっていうのは、その人を守るとかではなく、その人が障害を持って産まれてきて今まで奪われてきたもの自分で気づけなかったものとか、発揮できないことってあると思うんです。僕たちと一緒に考え伝えることで、その人が変わっていけるんやったら、それはありかなと思う。自立生活センターで相談にのって、ヘルプセンターで介助を支えて、あるくの日中活動の場所で活動し、その人がみんなと関わっている、当たり前か分からんけど、自立生活を全力でぶつかってんちゃうんかなって思いますね。



鈴木さん

南光：あるが実際に支援して自立した人は何人いてるの？

安原：よく聞かれるんやけど、それってなんで聞くのか疑問に感じる。それが「すごい」とか「少ない」って何かの基準になるのは、引っ掛かる。それぞれのセンターが一生懸命取り組んでやってるから、人数だけで力量が決まるとか、数が多いと凄いからっていうようなことが絶対起こる。そこをクローズアップされるのはちょっと違うかなあと思います。

南光：別に僕はそれを聴いて評価するとかじゃないんやけど、どんな状況なんかなあっていうことを僕としては知りたいなあって。

安原：それが紙面に載ると評価される対象となってしまう。私たちのこだわりかもしれない

けど、自立した人の数や一番を目指すことやスローガンを掲げてしまうことが何かを見失ったり縛られてしまう。学校生活の中でまわりの人にあわせることをずっと頑張ってきた。まわりの人と違うことや同じことができないことで自分自身を否定するようになった。夢を持つことや障害をもっている自分を好きになることなんかできなくなり、社会の中から疎外されているように感じていた時代を経験してきたからこそ、自分たちが社会に合わせるのではなくて、どんな人もこの社会にいていいんだよっというふうにしていきたい。だから、そのへんのこだわりがある。いろんなことに制約されてしまうと自己実現もむずかしくなってしまう。

太田：自己実現していくのは凄く大事。障害者やから施設に入ったり入院しとかなアカンのかっていうのは違うと思うし、自立だけじゃなくて社会で地域で生きていく中で障害者やからやったらアカンとかっていうのが、いっぱいあると思うので、障害があってもできるように、自己実現ていうか、そういうのはやっぱり変えていきたいと思うし。自立することによって色んな社会資源を使ったら、知り合った人達も「障害持っても地域で自立できるんや。」っていう考えを持ってくれたら、それはそれで有りやと思うし、大きなことやと思うので。そういったところから大事にしていかなアカンねやろなって思います。

安原：地域で自立生活している障害者がいっぱい増えて、その生活があたりまえになっていけば、周りの人の意識も変わってくると思うし、その人たちがロールモデルになっていき、障害者の社会参加もどんどん広がっていく。

南光：ただ一方で相談件数を何件あげろとか言うてくるやんかぁ。それに対してはどう考えてますか？

安原：そこはすぐに変えられるものではないと思う。うちは件数にはこだわっていませんと大きく言えませんが、一般社会の中では件数が多いほど頑張っていると評価されてしまう。私たちにとっては、一人ひとりにどう向き合うかが大切だと感じている。でも、そういうのは伝わりにくい。すぐには変えられないけど、今やっていることはちゃんと伝えていきたい。いろんな人と充分に向き合っていくことが自分たちの力にもなるし、遠い先になるかもしれないけど、社会を変えていくことにもつながっていくと感じている。

鈴木：基本的には、その人を見る。それが出来る限りはここで頑張ろうと自分自身が思っている部分があります。関わる人が広がってほしいとも思うし、事業だけで見ると逆に考えなアカン課題だったりする部分でもあるんですけど、相談件数だけに注目したら終わりだと思ってるんです。それではやっぱり私たちがやってる意味がなくなるし。

安原：相談件数を上げるためやったら私たちが別にしなくても専門家がしたらいい話。私たちがやっている意味がある。

鈴木：でも、自分たちの力はまだまだ小さいから。その中で考えなアカンことも確かに必要やけど、自立生活センターで考えているところにおいては、それだけはやめたくないっていうか。みんなそういうのを持っていると思えているから、ここは成り立ってやっているのだ

と思っているんですけど、事業としてどうしていくかっていうことと自立生活センターの当事者として自分たちがどうしていくのか両方合わせてというか、大事にして考えていかなアカンと思う。

南光:そういう思いの中で、こういうところは難しいなあとか、どうしても出来ないなあっていうのはありますか？

安原:自分でもそうなんです、社会にはあきらめてしまう環境っていっぱいある。

南光:どうしようもないっていう現実もあるもんねえ。

安原:これまでの経験からそうしてしまったり、よく陥ってしまうパターンから抜け出せなくなる。特に家族との問題になると簡単には解決できなくて、パワーレスになる。これまでの自分の人生をふりかえると長年の中でつちかったものはそう簡単にはくずせないと知った。でも、必ず変えられる。自分の経験からいくと。

安原:何か難しいことある？

太田:難しいことやっぱりありますねえ、サポートをしていく中で、その人のペースであったりとかやり方とか、その人らしさ、その人のやり方を大事にしていかなアカン。というのは思ってるんですけど、やっぱりサポートしていく流れの中で、どうしてもこっち側のペースになったりとか、よくありがちな事かもしれないですけど、そこの難しさっていうのは日々考える部分がありますねえ。自分に自信がなくなっていく時がある、やっぱりこっち側がこう思って向き合っても向こうが違う方向をプイッと向いてしまったら何を信じたらいんやろうであったりとか、僕も信じるから向こうも信じてもらいたいっていう思いがあるし、そういった中で、最終的には信じるんですよ。それがなかなか持続するかっていうと弱い部分もあるので持続できない部分もあるんですけど、そこで諦めてしまったら終わりやろうなっていうのが僕の中であるので答えになってるかどうか分からないですけど難しさっていうかペースっていうか支援していく中でのペースの難しさっていうのは僕の中ではあります。



安原さんと鈴木さん

「よくやったと思うことは」

南光:今まで、やってきて、ようやったなあ。良かったなあ。と思うことは？

太田:自分のことから言わせてもらおうと、よう自立したなあと思う。自信がなかったけど、自分でやっていけるかなあと思ったし、みんなに支えてもらって乗り越えられた部分があるんですけど、良かったなあと思う。自立して9年目になるんやけど、自分の中で良かったなあって思うのと、仲間を応援して行って、施設や病院から自立した時に、その人が「自立して良かったわあ」って言うてくれた時は、本当に良かったなあって思う。その人が自分の家で自分の生活を組み立てていくのを見ていると本当に良かったなあって思う。その人の施設でのしんどさっていうのを知ってるから、その人が自立したら「応援して良かったなあ。」って、もっともっとたくさん自立する仲間を増やしていきたいと思います。10年前はこんな考え方ではなかった。ずいぶん変わったなあって思う。これがある意味、本来あるべき姿だとも感じる。この10年、ほんとにいろいろあった。何度も嫌になって、この活動から抜け出したいと思った。でも、それを見守ってくれたり、支えてくれてた鈴木さんや太田くんがいたから、やってこれた。私にとっては、大切な人たちです。

南光:鈴木さんはどうですか？

鈴木:太田さんが言ってたこともそうですし。良かったなあと思うところはたくさんあるんですけど、関わった人達が自分の思いや自分の生活を言えるようになっていく部分に関わっていけることであったり、交通や個別の関わりでもそうですけど、障害者として生きてきて、障害者の人と自分自身が多く出会って関わりながら生きてきて大きく変わることができたり、社会はまだまだ何も変わっていないっていうことを個別の取り組みや交通のことでも感じることは沢山あるし、マイノリティーのことを考える視点を持ち続けていきたいなと思います。

山下:事務所を引っ越したのはいつ？

安原:2005年。来年10周年。10年もやってるんだね。私たち。

南光:みんな30代？

太田:30代です。

南光:若いねえ。

南光:鈴木さんはナビに実習に来たころは何歳ですか？

鈴木:21歳ぐらいです。

南光:現実的になるけども、これからあるで企画してることは？

鈴木:ピア・カウンセリング講座に取り組んでいきたいなと考えています。

安原:集中と長期をやる予定です。

南光:来年度？

安原:来年度です。やると決めないと出来ませんね。樋口恵子さんとピアカン講座をやったことがあって、彼女がアメリカにわたって、ピアカンと出会って、日本に持って帰ってきて全国に広めたと自分の経験をもとに話をしていた。とてもかっこいいと思ったし、こういう

生の声を今度は私たちがちゃんと伝えていきたいと思った。私はピアカンでいろんなリーダーと出会って、すごく影響を受けた。だからこそ、講座を開いて、もっとたくさんの人に伝えていきたいという気持ちになって、来年度ピアカン講座をやろうと決めた。決めたからにはまわりの人たちにもちゃんとそのことを伝えていき、協力してもらわなければならない。講座をする団体も減ってきたこともあるので、来年度は必ずやりたい。

南光：よかったねえ。

太田：そうですね。やりましょう。

そこで色んな人と出会いたいと思うし、講座がやりたいだけじゃないし、そっから何かのきっかけになればと思うし。ナビはどうですか？

南光：企画は色々やってるんやけどねえ。

足立：自立取り組みかなあ。

南光：今、21歳とか若い障害者がILP受けて自立しようとしてる段階やから中部としても応援していこうとしてる。自立取り組み報告会もやろうとしてるんです。中部全体の問題やけどグループホームをどう考えていくか、2つあるねんけど、1つはすごく古い家やから。しかも今まで3人入居しててんけども、一人は一人暮らしを始めたし、二人になっちゃって。もう一人も一人暮らしを希望してるんでね、1つなくしていくことも考えていかなアカンのかなあ。という意見もあるし、一方でなかなか重複の障害者にとったら、日常生活の支援が必要やからグループホームという形のほうがいいんかなあと思ったり。グループホームのあり方を考えていくのが来年度やることかなあ。

足立：日々の仕事に追われてるんやけども、自立支援の原点に返ってやっていきたいなあと思うところはあるんですけど。自立取り組みが中部でもナビでもひとつの中心なんかなあ。と今は思う気がします。

南光：そういう意味では今日インタビューさせてもらって勉強になりました。今日はありがとうございました。







## エッセイ(第1回)

もはや、いつの間にか運動はライフワーク！？

筒井 純子

みなさん、こんにちは。筒井純子と言います。私は現在、城東区にある自立生活センター・おさかひがしで障害当事者として働いています。縁あって、ナビの運営委員を5年間ほどやらせていただいております、今回、「ナビゲーション」に掲載させていただくことになりました。実はお話しをもらったとき、「今更何を書くねん！」と突っ込みながらお断りしたかったのですが、何せお世話になっている身ですので、泣く泣くお引き受けした次第です。

そのとき、スタッフの方から3つの「お題」をいただきました。

- ①障害者運動と関わるきっかけ
- ②全障連の活動の中で大切にしてきた「想い」
- ③これからの障害者運動に期待するもの、求めていくもの(特に女性障害者として訴えていきたいこと)について書いてほしい、とのことでした。

### 障害者運動と関わるきっかけ

……ということで、まずはこのテーマから筆を進めたいと思います。

障害者運動との関わりを考えると、私の生い立ち抜きには語れませんので、自己紹介とあわせてしばらくお付き合い願いたいと思います。

私は3000gで生まれて丸々太った元気な赤ん坊だったそうです。でも2歳になっても歩けず、あちこちの病院を駆け回りましたが、原因が分かりませんでした。やっと阪大病院での診断の結果「脳性麻痺」と判明しました。脳性麻痺にも色々あって、私の場合は緊張型ということで、何かやろうとすると緊張し、意思とは逆に身体が反応してしまいます。私はまだその経験はないのですが、やはり同じ脳性麻痺の友人は、虫歯を一本抜くために全身麻酔をされたという話をよくしていました。

さて、いよいよ私は就学時を迎えますが、就学通知なるものが来ないので、教育委員会に問い合わせると「他の子どもに迷惑だから」という理由で「就学猶予・免除」になり地域の小学校へは行けませんでした。勿論親は抗議しましたが、聞き入れてもらえなかったそうです。

私は三人きょうだいの末っ子で、兄や姉と一緒に学校へ行く事を楽しみにしていた私にとって、地域の学校へ行けなかったことは大きなショックであり、現在もなお、憤りを禁じえません。今思えば、このことが私を障害者運動へ導いた原点かもしれません。

6歳から2年間、機能訓練・言語訓練を行うために、「身障センター」へ週1回通っていました。そこではいつも一対一で、ある時はひたすらろうそくの火を消したり、大きなビンの水をストローでブクブクやったり、またある時はひたすら砂利道を歩かされたり、階段の上

り下りなどをさせられました。1時間半ほどのその時間が、子供心に長く感じた事を覚えています。

そこで養護学校を勧められて、家からスクールバスで1時間半かかる旭区の養護学校（現在、特別支援学校）へ入学しました。当時は、地域の普通学校へ行けなかった障害児が数多くいました。国はその対策の一つとして、養護学校の義務化を図ったのです。しかしそれは紛れもなく障害者の隔離政策であったことは言うまでもありません。

養護学校では、一学年2クラスしかなく、1クラス10人程度でした。また毎日のように機能訓練や言語訓練があり、その時間は苦痛を伴うこともありました。壁に備え付けられた鉄製の大きな車のハンドルのようなものを両手で回すのですが、これがやたら重い！そしてここでもまた階段の上り下りをやらされました（「専門家」はよほど階段が好きみたいですね）。

学校生活はそれなりに楽しいこともありました。往復3時間の登下校は、兄弟や地域の子どもたちとの関係性を希薄なものにしていきました。

私は閉鎖的で刺激のない養護学校の生活に疑問を持ち、小・中学を経てめでたく普通高校へ進学しました。全校生徒1000人という普通学校の規模の大きさに戸惑いを隠せませんでした。

さあ、いよいよ障害者運動との関わりが出てくるのですが、残念ながら、紙面の都合で今回はここまでということにさせていただきます。何だか本題に入る前に終わるのは心苦しいのですが、ごめんなさい。

次回も読んでもらえる事を願って…

つづく！





## 編集後記

あと何日かで今年も終わり。日本は「四季のある穏やかな気候の自然豊かな国」だったのが、いまや「猛暑日」が続く熱帯の夏が終わったとたん、秋をすっ飛ばしていきなり冬が来る、まるで「二季」の国になってしまった。そんな気持ちになった一年でしたね。気候だけでなく政治に対しての期待も政権交代で高まった熱気が、一気に冷めてしまった一年ですね。

その一年を象徴するかのように「障がい者制度改革推進会議」の熱い議論をまるで北風で押さえ込もうとするかのように、「障害者自立支援法改正案」がまさに「障害者週間」初日の今日（12月3日）国会で可決成立し、まさに「悪法」をゾンビのように生きながらえさせようとする出来事がありました。

障害者の尊厳を傷付けた「悪法」がこのまま生き延びれば「季節」の冬はいつか過ぎて、障害者にとって本当の「春」はいつまで経ってもやって来ません。「私たちのことを私たち抜きにきめるな！」に一層の力を込め北風に負けない熱気を持って、本当の「春」を迎えられるようにこれからも頑張っていきましょう。（南光）

▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽

自立生活センターナビとは…

☆ 私たちの考える「自立」は…

働いてお金を稼ぐ事や身の回りのことを全部自分で出来るようになる事、それだけが「自立」でしょうか？もちろんそれも大切なことですが、できない事は人の手を借りたり、気持ちを上手く伝えられないときには仲間にサポートしてもらったりしながら、一人一人の生活を創っていくことも「自立」に色々な方法でお手伝いしていきたいと考えています。

☆ 地域で障害者の自立を実現していくための「道案内（ナビゲーター）」として例えば「介護してくれる人を探しているんだけど？」「家の中をもっと使いやすくしたいけどどうすればいいの？」そして「自立したいけど自分には無理かな？」

自立生活センター・ナビでは、こうした障害者や家族の悩みや相談について、障害を持つピアカウンセラーが同じ障害者の立場でお話を伺い、制度の説明や申請のお手伝い、住宅改造などのアドバイスをさせていただきます。その他、電動車いすで街へ出かけた仲間と一緒に料理を造ったり地域で生活していく上で必要なことを、楽しみながら経験できる「自立生活プログラム」や、自立生活に関わる各分野の方々をお招きしてお話を伺う「自立生活セミナー」の開催、情報誌「ナビゲーション」の発行も行っています。

はつこ

発行

じりつせいかつ

自立生活センター・ナビ

でんわ 06 (6760)2671

じゅうしょ

住所

〒546-0042 大阪市東住吉区西今川2-3-8

おおさかしひがしなみきりやましくえいのまち

ファックス 06 (6760)2672